ェーダ』のP、三二―三四の内容と一致〉、発動の時を知るべし。春には痰膿動き、夏の内には風病を生じ、秋時には黄熱増し、冬節には三倶に起る。〈『スシュルタ本集』第一巻P、一六の内容と同じ〉春には渋、熱、辛を食し、夏には腻、熱、鹹、醋、秋時には冷、甜、腻、冬には酸、渋、腻、甜、この四時の中において服薬および飲食、若しかくの如き味によらば、衆病よって生ずることなからん。〈『アーユルヴェーダ』P、三五〇―三五三の内容と同じ。〉食後の病は膿により、食消の時は熱により、消後は風によりて起こる。時に準じて病を識るべし。すでに病の源を識りおわれば、病に随いて薬を設け、たとい状殊（病状）を患うとも先づその本を療すべし。風病は油腻を服し、患熱は利（肛門から出す）を良となす。膿病は変吐（吐く）すべし。〈この治療法は『入門アーユルヴェーダ』の予防と治病のための排出療法P、九四に一致〉総集には三薬を須う。風熱膿俱にある。これを名づけて総集となす。病の起こる時を知るといえども、その本性を観るべし。かくの如く観知しおわりて時にしたがいて薬を授くれば飲食と薬とたがうことなけん。是を善医者と名づく。

また八術を知るべし、諸の医方を総攝（まとめる）す。ここにおいて若し名閑（明らか）ならば衆生の病を療すべし。いわく針刺（首より上部の病気）、傷破（一般外科）、身疾（内科）並に鬼神（精神病学）、悪毒（毒物学）及び孩童（小児科）、年を延べ（健康増進）、気力を増す（強精法）。〈八術はアーユルヴェーダの分類法である〉

先づ彼の形色、語言及び性行を観、然して後にその夢を問い、風、熱、膿の殊を知る。乾瘦にして頭髪少く、其心定住（落着き）無く語多くして飛行を夢む。この人はこれ風性なり。少年にして白髪を生じ、汗多く及び瞋（いかり）多く、聡明にして夢を見る。この人これ熱性なり。心定り身平整し慮審らかにして（考え方がちみつである）頭に津腻（液体）あり、夢に水白物を見ば、これは膿性なりと知るべし。〈ヴァータ、ピッタ、カパの体質の記述は『現代に生きるアーユルヴェーダ』P、三〇―三二に一致しているものがかなりある。〉」とある。すなわち除病品にみる医療内容は、1)身体の七種類の組織要素を熟知しなければいけない。2)風、火、水、の三つの病素の障害による病気および季節との関係を述べ、3)季節の違いに応じて摂取する飲食物の味を上手に変化させること、4)三つの病素と個人の体質との関係を述べており、まさにアーユルヴェーダのもっとも重要な理論と生活方法を簡潔に記している。

（平成六年六月例会）

やみの医術―鴆鳥―実在から伝説へ

真柳　誠

鴆鳥という毒鳥が古代・中世の中国文献にみえる。しかし近代以降、毒性のある鳥は知られておらず、鴆鳥も空想の産物と考えられてきた。ところが『サイエンス』92年12月30日

号に、世界初発見の毒鳥が報告された。ニューギニアの密林に棲息するモリモズ属のズグロモリモズ等で、皮膚・羽毛の毒性が強く、主な毒成分も確定された。鴆鳥の記録にも検討の手がかりが得られたのである。

鴆鳥による毒殺記録は多い。『国語』の前六五六年にあたる策謀では、酒に鴆、肉に猛毒トリカブトをしこむ。トリカブトに併記されるので、鴆鳥の存在と毒性は前七世紀から知られていたと分かる。トリカブトは一方で薬用が開発され応用知識も広まった。が、毒殺専用の鴆鳥は違う。暗殺という非公然の需要ゆえ毒殺技術が秘密裏に伝えられ、人々に恐れられた。まさに闇の医術だった。

『晋書』には三世紀末と三五八年に鴆鳥を捕獲した記事があり、当時棲息していた事実を物語る。六五三年の『唐律疏義』も毒薬の使用販売に関する刑を説明し、毒薬の筆頭に鴆毒を挙げる。これは鴆鳥が七世紀にも実在し、毒殺に使用される可能性があった証拠といえる。『鉄囲山叢談』によると十二世紀初も宋政府の毒薬庫に鴆毒があり、各毒薬は三年ごとに献上されたという。

しかし中国正史の鴆殺記録は北宋直前が最後で、『鉄囲山』以降に鴆鳥の実在を示唆した記録もない。

医薬書では一世紀に原型ができた『神農本草経』の犀角条に初出し、鴆羽毒を犀角が解毒すると記す。つまり鴆鳥は羽毛に毒性があった。もちろん羽毛は食用にならず、鴆羽の食中毒はありえない。まぎれもなく羽毛は毒用で、しこんで鴆酒としたのだった。これを酖ともいう。一方、鴆・酖の字は現伝する漢以前の他医書にない。出土した漢以前の医薬文献にもない。鴆鳥には薬効がまだ開発されておらず、闇で伝授される毒殺の用途しかなかった。それで医薬書では『神農本草経』のみ羽毛中毒を記載するのだろう。

五〇〇年頃、陶弘景は『神農本草経』を増補注釈して『本草集注』に改訂。ここで鴆鳥が正条品となり、「鴆鳥の毛は大毒があり、五臓に入るとただれさせ、人を殺す。そのくちばしは蝮蛇の毒をけす」、と経文に記された。くちばしに蛇の毒消し効果が認められ、本草の表舞台に姿を現したのである。また陶弘景は羽毛も蛇の毒消しになり、くちばしは蛇よけになると注する。

他方、ニューギニアの毒鳥は皮膚・羽毛の毒性のため蛇や鷹に襲われない。すると鴆羽の毒性も外敵防御のためだろう。それで蛇は中毒を恐れ、毒蛇であろうと鴆鳥を襲わなかった。鴆鳥に中毒したり、つつかれて逃げ去る蛇が目撃されたかも知れない。つまり、くちばしによる蛇よけ効果は以上から連想とみるのが自然である。連想を重ねれば、くちばしや羽毛による蛇の毒消し効果も案出可能だろう。けっきょく鴆鳥は毒性だけに現実性があり、『集注』の経文や陶弘景注の薬効は相当にあやしいのである。

一方、陶弘景は『集注』で増補した薬物の約半数を実物不明の「有名無用」に分類したが、鴆鳥は実在を認めて「有名無用」としていない。ところが唐政府が『集注』に増補注釈

し、六五九年に勅選した『新修本草』は鴆鳥を「有名無用」に再分類した。『新修』は鴆鳥を存否不詳と判断したのだろうか。その六年前、同じ唐政府編纂の『唐律疏義』が毒薬の筆頭に鴆鳥を挙げるにもかかわらず。

だが『新修』は現地に取材したらしい注を鴆鳥条に加え、南方に沢山棲息するという。しかし蛇の毒消しと蛇よけ効果に一切コメントせず、「有名無用」に分類した。意図は明瞭だろう。鴆鳥の存在を否定したのではなく、毒性のみ認め、あやしげな薬効を認めていないのである。換言すると毒になるが、薬にならない。それで「有名無用」とした。

一方、『新修』は全国に頒布された公定薬物書。鴆鳥の薬効を認めると、『唐律疏義』に定めた毒薬取り締まりに不都合をきたす。「有名無用」とした背景には、鴆鳥の毒用防止の意図もあったに違いなかろう。のち宋政府・明政府の勅選本草も「有名未用」に分類し、記述も『新修』の文章を転載するだけで注ひとつ追加しない。唐も宋も明も政府なら当然の対応であった。

こうして鴆鳥は本草の表舞台を去ったが、実像が闇にかくれると余韻で虚像が独り歩きし始める。舞台は説話の世界だった。『新修』より百年ほど後の『朝野僉載』に次の話がある。「鴆の水飲み場は犀がいる。犀が角をすすぐ前に水中の物を食べると必ず死ぬ。鴆が蛇を食らうからだ」。これは鴆毒を犀角が消すという『神農本草経』の説と、鴆鳥が蛇を食らうという『漢書』応劭注の結合。鴆毒が蛇に由来することも暗喩している。

鴆毒を蛇由来と明言するのは宋代の文献に多い。さらに宋代十二世紀の『爾雅翼』は毒性にからめて異鳥ぶりを述べた説話を広く集めている。こうして鴆鳥は唐宋代の説話中で虚像が膨らんでいった。にもかかわらず一連の話には、かつて暗殺に用いられた陰惨な鴆毒のイメージが片鱗もない。説話の時代は鴆殺とされる殺人記録が史書から消える時期とほぼ前後する。それで鴆鳥への恐怖感が失われたらしい。逆に毒蛇を食らう益鳥のごときイメージが生まれた。鴆毒の対象はもはや人でなく、蛇なのである。

しかし鴆鳥の虚像化も宋代でほぼ終わる。唐代に薬効を否定され、宋代に毒物として現実性すら失った鴆鳥に与えられた道はただ一つ。過去の全記録が伝説とみなされ、歴史の片隅に埋められたのである。

ところがニューギニアの毒鳥から、鴆鳥の虚像と実像を見分ける手がかりが得られた。検討の結果、鴆鳥はほぼ七世紀まで確実に中国に実在していた。のち伝説化が進行し、さらに一転して伝説の伝承までとだえた事情も知ることができた。

（平成六年九月例会）